

139

2022 WINTER

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 10

浦上玉堂《寒巖林松図》(部分)
江戸時代後期(19世紀初期)
紙本墨画淡彩
37 × 32 cm

かがやく狂騒と情熱の時代 —エコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンス

橋村 直樹(学芸員)

この冬、岡山県立美術館では、名古屋市美術館の誇る「エコール・ド・パリ」と「メキシコ・ルネサンス」のコレクションの中から厳選した作品群で構成される特別展を開催する。この展覧会を大きく特徴づけるのは、モディリアーニやシャガール、ユトリロや藤田嗣治といった人気の高いエコール・ド・パリの巨匠たちの作品とともに、メキシコ壁画運動として知られるメキシコ・ルネサンスの3巨匠ディエゴ・リベラ、ホセ・クレメンテ・オロスコ、ダビッド・アルファロ・シケイロスや骸骨の風刺版画で名高いホセ・ガダルーベ・ボサダ、さらには女流画家フリーダ・カーロらのメキシコ近代絵画をあわせて紹介する点にあるといえるだろう。

よく知られるように、エコール・ド・パリは、両大戦間期にあたる狂騒の時代の1920年代を中心として世界各地から芸術の都パリへと集まって制作活動を行なった芸術家たちの総称である。悲劇的でポヘミアン的な人生を送ったユトリロ、モディリアーニ、パスキン、

スーチンや、「モンパルナスの王」キスリング、さらにはシャガールや藤田らが代表的な存在だ。彼らはエコール(流派)として一括りにされるものの、統一的なイズムや共通の様式的特徴があったわけではなく、それぞれが独自の画風を確立して個性を輝かせた。とはいえ、彼らの多くは東欧出身のユダヤ系で、モンマルトルやモンパルナスを拠点として退廃的で奔放な生活を送り、その作品は華やかながらもどこか哀愁が漂うという共通する傾向がみられる。なかでも、憂愁をおびた優れた肖像画(図1)を遺すもアルコールと麻薬に溺れ、35歳で早すぎる最期を迎えたモディリアーニは、奇しくも同じく早逝したジェラルド・フィリップ主演の『モンパルナスの灯』(1958年)とアンディ・ガルシア主演の『モディリアーニ 真実の愛』(2004年)でその悲劇的生涯が2度も映画化されたように、「呪われた画家たち」とも呼ばれるエコール・ド・パリの芸術家像にもっとも当てはまる人物といえるだろう。

アメデオ・モディリアーニ(1884-1920)は、トスカナ州の港町リヴォルノのユダヤ人家庭に生まれ、イタリア各地で古典美術に接してフィレンツェやヴェネツィア的美術学校で学んだのち、1906年にパリへ出た。モンマルトルのアトリエを転々としつつピカソらと交流し、1907年のセザンヌの回顧展で大きな衝撃を受けた。1909年にモンマルトルからモンパルナスに移ってスーチンや藤田らと交わり、初期のパトロンの医師ポール・アレクサンドルを介して彫刻家ブランクーシと出会って5年ほど彫刻を主に制作するようになる。1914年に本格的に絵画へと復帰するが、モディリアーニの作品はイタリア的な線とデッサンの伝統に連なる人物像がほとんどで、南仏に疎開した1918年以前の作品の多くがモデルのわかる肖像画であった。恋人や親しい画家や画商など身近な人物を描いたそれらの肖像画の中で一際大柄な人物を描いたものがある。のちにメキシコ・ルネサンスの中心人物のひとりとなる、身長185センチ、体重100キロを超える巨漢のリベラの肖像画だ。

ディエゴ・リベラ(1886-1957)は、メキシコシティのアカデミア・デ・サン・カルロス美術学校での初期の学びを経て、1907年にスペインのマドリッドに渡ってヨー

ロッパ留学を果たした。1909年にはパリへ移り、個展を成功させた1910年から1年ほどの一時帰国をはさんで、1921年までモンパルナスを拠点としてピカソやエコール・ド・パリの芸術家たちと交流しながらキュビズムに傾倒した作品を遺した。モディリアーニとは1914年から飲み仲間になり、時に衝突しながらも親しく交流し、短期間同居したこともあった。この頃以降、モディリアーニによるリベラの肖像画が油彩や素描で繰り返し描かれている(例えば、『ディエゴ・リベラの肖像』1916年、サンパウロ美術館)。スペインとパリで西欧モダニズム絵画を学んだリベラは、メキシコ革命と芸術の社会的役割についてのシケイロスの考えに賛同して1921年にメキシコへ帰国し、1920年代から30年代にかけてメキシコ革命後の復興期の芸術運動である「メキシコ・ルネサンス」をオロスコとシケイロスとともに牽引した。

ところでリベラは、ヨーロッパ留学以前、アカデミア・デ・サン・カルロス美術学校時代にボサダと出会い、作品を熱心に見て大いに感銘を受けたと後年語っている。ホセ・ガダルーベ・ボサダ(1852-1913)は、メキシコシティのパネガス・アローヨ工房に所属し、災害や殺人、政治事件や宗教的奇跡などメキシコの民衆生活に関係するあらゆる出来事をテーマに、大衆新聞や雑誌などの挿絵を描いた画家で、とりわけ陽気で騒がしく動きまわる骸骨をモチーフにした風刺画(図2)で名高い。その強烈な風刺性により革命芸術家の先駆けとして高く評価され、オロスコやリベラにも大きな影響を与えた。リベラが美術学校時代にボサダと出会い感銘を受けたという上述の話もそのことを裏付けているように思われるかもしれないが、実はリベラはボサダとは会っておらず、若かりし頃の出会いはリベラによる作り話とされている。とはいえ、1947年の壁画《アラメダ公園の日曜日の午後の夢》(ディエゴ・リベラ壁画館、メキシコシティ)の中央に骸骨を挟んでボサダと少年時代の自らの姿を描いていることから明らかのように、ボサダ芸術を評価しボサダを称賛していたことは確かだろう。



図2:ホセ・ガダルーベ・ボサダ《山高帽子をかぶった骸骨》1890-1913年
名古屋市美術館蔵

このエッセイでは、芸術家同士のつながりを辿ってパリからメキシコへと視線を移しながら、エコール・ド・パリのモディリアーニからメキシコ・ルネサンスのリベラ、さらにはメキシコ革命下の版画家ボサダまでを簡単に紹介した。当館における特別展では、ここで紹介した作家たちの他、シャガールやユトリロ、パスキンや藤田らエコール・ド・パリのスターたちの作品に加え、リベラの妻で、近年特に人気の高いフリーダ・カーロらのメキシコ近代絵画、さらには荻須高德らパリで活躍した日本人画家たちの作品も紹介する。20世紀前半のパリとメキシコを舞台に展開された、憂いを秘めた華やかさと力強さがある多彩な美術の魅力を同時に堪能することができるのと同時に、名古屋市美術館のコレクションの充実ぶりを実感できる展覧会にぜひご期待いただきたい。

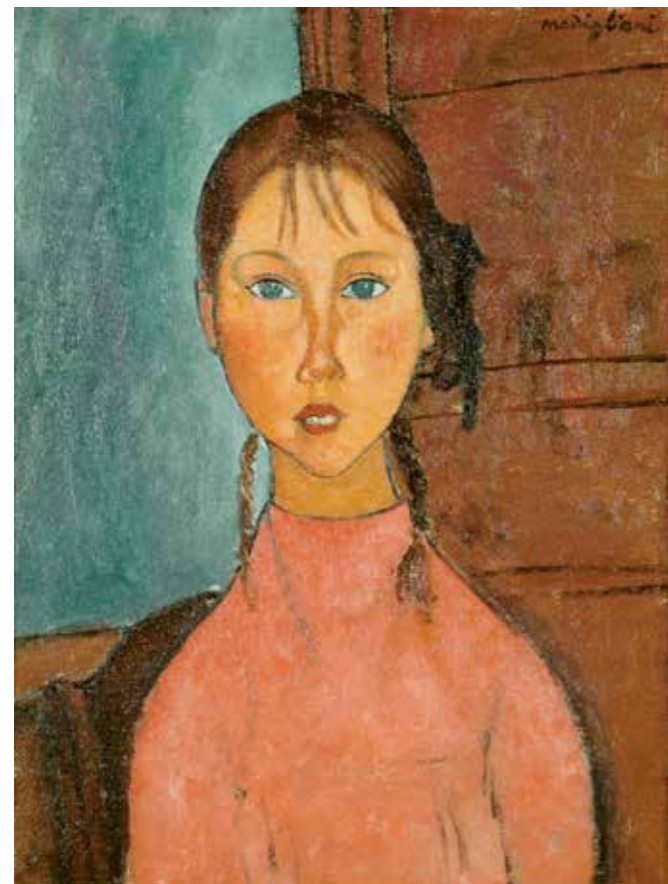


図1:アメデオ・モディリアーニ《おさげ髪の少女》1918年頃
名古屋市美術館蔵

【特別展】「名古屋市美術館コレクション—エコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンス」(会期:2023年2月3日~3月12日)

当館では現在、2017年度(第11回)と2018年度(第12回)に岡山県新進美術家育成「I氏賞」奨励賞を受賞した4人の作家による展覧会を開催中です。

展示室に入ると、広々とした空間に大小さまざまな立体作品がスポットライトを浴びて浮かび上がります。入口近くには先ず、来場者を迎えるように江村忠彦の《どえらいなみ》が鎮座します。仏像や伝統工芸にも用いられる「乾漆」の技法を、独自の解釈で発展させた生命感のある造形に引き寄せられ、会場一帯に配された12点の作品を瀬戸内の島々を周遊する感覚で眺めることができます。漆ならではの質感や温かみを、実際に触れて確かめられる作品もあります。周囲の壁面には、「織る」という行為を基本に制作を続ける柳楽晃太郎の作品が並びます。正面奥でひと際存在感を放つ《PRIDE #5》は、ネクタイそのものを横糸にして織り上げた長さ4mにも及ぶ大作です。また、織る過程で見られる構造の美しさをシンプルに伝える《weaving》と、倉敷市の織物工場に残されたイグサの繊維に備前の土を浸透させ野焼きにした《火葬》、2つの最新シリーズからは表現への飽くなき探求心が感じ取れます。江村と柳楽のコラボレーションによる展示空間は、建物自体の高さや奥行の感覚を再認識させ、まるで舞台上の景色のような緊張感を漲らせています。

続く一室では、現代的な社会現象を背景にポップな色調で人物像を描く志村佳苗の油彩画が、異質な空気感を漂わせます。インターネットが普及し、SNSを通じて見知らぬ相手とも気軽にやりとりできる日常に潜む闇を、若者たちの生の声にも取材し、冷静な視点でとらえています。本展では《パパ活の結末を求めて歩いた金木犀の夜道》と《あの子のお葬式》の連作を中心に、鑑賞する側にも選択の機会を提示するインスタレーションに取り組みました。

最後に、木炭によるドロ잉を基軸に、映像や彫刻など多様な表現手法を用いる大島愛の制作の軌跡を一望できる濃密な空間が展開します。大島のひたむきな感性が、モチーフとなった人物に寄り添い共鳴しながら、画面の奥深くまで浸透してゆくような世界観に、しばし時を忘れて見入ってしまいます。

表現ジャンルも活躍の場も異なる4人の作家が、郷里である岡山に集い、それぞれに培ってきた芸術の粋を発表するまたとない機会です。初日のアーティストトークでは、互いの制作意識や今後の展望について、熱心に意見を交わす場面も見られました。個性ゆたかな座標軸を備えた4つの感性が響き合い、つながり合う空間を、ぜひ会場で体感してください。



1



2



3

1: 江村忠彦・柳楽晃太郎 展示風景
2: 志村佳苗《あの子のお葬式》インスタレーション(部分)
3: 大島愛《黒白を弁ぜず》展示風景

北川太郎の《手の考える世界》*を紹介する。本作品は3作品で構成される作品群である。北川は鑿と石頭を用いた手仕事での石彫の制作を行っている。筆者は本タイトルを聞いた際、手仕事にこだわる彼の作品タイトルとして少し違和感を覚えた。なぜ手を使って考える「手で考える世界」ではなく、手が考えた世界「手の考える世界」なのだろうか。

一般的に彫刻作品は、その技法から塑造と彫刻の大きく2つに分類される。塑造は粘土など可塑性のある素材から、心棒(芯棒)と呼ばれる作品の骨格に肉付けしていくことで形をつくり出す。そして塑造などの一部を除き、型取りを行い鉄や樹脂など硬質で耐久性のある素材へと置き換えられる。一方彫刻は石や木など硬質な素材の塊から形を彫りこみ、素材そのものが作品となる。彫刻が塑造と大きく異なるのは心(芯)と素材の扱いだ。塑造において、作家がつくる心棒が作品の物理的な支柱になると同時に、作品の大まかなイメージを決定する。しかし彫刻においては、素材の塊そのものが物理的な支柱となる心(芯)を内包している。もちろんその心(芯)は目視できないので、作家が素材の内部に心(芯)を意識しながら制作を行う。では彫刻における作品のイメージを形成する心(芯)は、作家と素材のどちらに存在すると考えられるだろうか。

北川は素材と対峙する制作の過程で、作品の完成形を見出していくという。となると彼の場合、作品のイメージを形成する心(芯)は、素材に存在すると言えるだろう。しかし《手の考える世界》というタイトルからは、文頭に述べたように、素材に存在するイメージというよりも、手の持つイメージを作品化したように読み取れる。

北川は近年、鑑賞者が作品に触れることができる場への発表を多数行っている。当館でも今年10月に彼の作品を暗闇の中で触れながら鑑賞するワークショップを開催した。暗闇という作品の形が見えない状態で手から形を読み取り、自身の頭の中でイメージし再び触れることを繰り返す。この体験が手を使って作品を楽しむことにとどまらず、石の質感や形から表現される作品のコンセプトまで言及することができたのは、彼の行う手仕事、道具としてのこだわりだけではなく、作品の形象を思考していくうえで大きな影響を与えているからであろう。暗闇という擬似的な素材の塊から作品の形を探るこの過程は、まさに彼の制作の一部を追体験できる時間であった。自身の考える形に石を加工していくのでも、素材に対しある種妄信的に形を求めるのでもない。北川の作品は、彫刻制作を通して自身の手で素材に触れる行為そのものが作品の心(芯)となり、手の考える世界が形づくられているのだ。



《しま》2006年 御影石 寄託作品



《時空ピラミッド》2015年 御影石 寄託作品



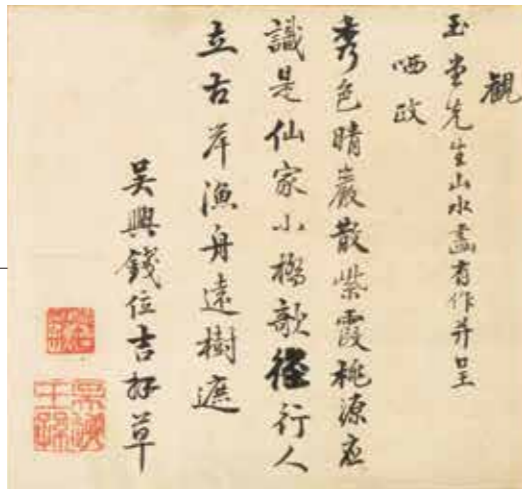
《静けさ》2019年 竜山石 寄託作品

* 2021年から、群像で展示する場合《手の考える世界》として発表。

新収蔵品紹介

File 22

山中訪友図賛詩(玉堂宛詩文)
森田 詩織(学芸員)



《山中訪友図賛詩(玉堂宛詩文)》(部分) 1巻 全図は当館所蔵作品検索システムにて公開中の画像参照

『倉敷・大原家伝来浦上玉堂コレクション受贈記念特別展示』(2022年7月16日~8月28日)にて、玉堂宛の賛詩が初公開となった。7枚が卷子にまとめられており*1、便宜的に巻頭から番号を付す。①、②は玉堂を琴の名手・伯牙になぞらえ、彼の音を讃える。③は老いてもなお澆刺として画や琴を携えている玉堂との縁を詠む。④は晩唐・杜牧「山行」の引用。玉堂への言及はないが、1805年5月と目される年記がある。⑤は聖福寺で会した玉堂について、琴や詩吟に巧みで「晋人之風」があると称す。⑥では「玉堂先生山水画有作并呈」とし、画面内容を描写する。⑦には「臥遊静観」の四字が書かれる。

これらの筆者はいわゆる「来船清人」で、①⑥⑦銭位吉、②劉景筠、③陸光烈、④姚静斎、⑤張秋琴、いずれも浙江省周辺出身の商人である*2。うち4人は*3大田南畝(1749-1823)の著述に登場する。文化2(1805)年、長崎奉行所に赴任していた南畝は、見聞を『瓊浦雜綴』や『瓊浦又綴』*4に記録し、詩を『瓊浦集』*5にまとめた。

南畝は暫く張秋琴や銭位吉と書簡にて交流し、初対面は8月16日、唐館での宴であったようだ。その後、「閏八月廿六日監永興船[丑年四番]見船主劉景筠財副陸光烈銭位吉重送位吉」(『瓊浦集』)、長崎を発つ彼らの船を見送る。滞在を続けた張秋琴とは、南畝が10月に江戸へ戻ったのちも詩文を交わしている。

南畝が長崎に逗留した同年、61歳の玉堂も同地を旅していた。5月27日、聖福寺(現長崎市玉園町)にて玉堂が琴を弾じ、それに応じて南畝が詩を贈ったと『雜綴』や詩集に記される。⑤には清人も聖福寺で玉堂の琴を聞いたとあるが、南畝はそこに同席しておらず*6、よって玉堂は2回以上聖福寺を訪ねたと考えられる。

長崎で明清画や清人と接した経験が作画の変化に現れる者もいる一方、玉堂はそれが顕著でないため、1年以上に及ぶ九州滞在中に触れたものが判然としない。そのなかで、日中の文物が集う寺院*7にて人々と交流を行っていたことが、この賛詩によって確かめられた。

さらに山水画への賛詩があることも興味深い。これまでも「来船清人」費晴湖筆の賛が紹介されているが*8、これは琴士玉堂に宛てた詩である。一方で⑥には、対象の画は所在不明であり発見が望まれるばかりだが、画賛であることが明記される*9。画家を自任しなかった玉堂だが、雅宴において琴とともに画も披露した様が、これにより伝わる。

賛詩筆者には、市河寛齋や大槻清準の著述にも名を見せる、活躍の場が多かったらしい商人がいる。今後も彼らについて調査を行いつつ、玉堂の足跡を辿りたい。

*1: 伝来等不明。材質や寸法の異なる7枚は、書写時期や玉堂との接点において種々の状態が想定される。

*2: 徳田武『大田南畝・島田翰と清朝文人』(大樟樹出版社、2019年)、唐権・劉建輝・王紫沁「来船清人研究ノート」(『日本研究』62号、2021年)

*3: 姚静斎は詳細不明。なお武元登々庵『行庵詩草』巻六に、嘉慶15(1810)年と記す「柳浦姚静斎」の序文がある。

*4: 両冊とも国立公文書館内閣文庫蔵写本を参照した。

*5: 『大田南畝全集』第4巻(岩波書店、1987年)を参照した。

*6: 8月16日から閏8月26日の間に聖福寺で三者が揃ったことも否定はできないが、清人との交流について市中で偶然会したことも詳述する南畝の見聞録には記載がない。

*7: 聖福寺は文雅の交流が多い場であった。『長崎の黄檗』(長崎歴史文化博物館、2022年)

*8: 『浦上玉堂関係叢書 資料編I』(学藝書院、2020年)、444頁参照。

*9: なお本巻付属箱の小口には「玉堂/山中訪友/附属」と記された紙が貼り付けられている。

展覧会スケジュール

12月
December

11月12日|土| - 12月25日|日|

【岡山の美術展】
第12回 I氏賞受賞作家展
江村忠彦・志村佳苗・大島愛・柳楽晃太郎

【岡山の美術展】
もっと伝統工芸
Contemporary Metalwork 変貌する金属

11月17日|木| - 12月4日|日|

【特別展】
第69回 日本伝統工芸展 岡山展

前期:12月4日|日| - 12月18日|日|

後期:2023年1月15日|日| - 1月29日|日|

【教育普及展】
第4回 みんなの参観日
「図工の時間・美術の時間
—子どもの学び—」

1月
January

2月
February

2023年2月3日|金| - 3月12日|日|

【特別展】
名古屋市美術館コレクション
エコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンス

名古屋市美術館の誇る「エコール・ド・パリ」と「メキシコ・ルネサンス」のコレクション。本展では、モディリアアーニやユトリロ、シャガールといった、1920年代を中心にパリで活躍した「エコール・ド・パリ」の芸術家たちの作品に加え、視覚的な力強さと明確な社会的メッセージを持つ、メキシコ近代美術である「メキシコ・ルネサンス」の作品をあわせて展示し、20世紀前半のパリとメキシコを舞台に展開された愛いを秘めた華やかさと力強さがある多彩な美術の世界を紹介します。

3月
March

*最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

2023年1月21日|土| 13:30~15:30

シンポジウム 「みんなで語ろう！
図工の時間・美術の時間」

講師 平田朝一氏(文化庁参事官(芸術文化担当)付教科調査官)、
鬼本佳代子氏(福岡市美術館主任学芸主事) 他
会場 2階ホール(先着100名) ※参加無料、事前申込

2023年2月4日|土| 14:00~15:30

記念講演会 「名古屋、メキシコ、パリ。
三都をつなぐ美術の物語」

講師 深谷克典氏(名古屋美術館参与)
会場 2階ホール(先着180名) ※当日先着順、要観覧券(半券可)

2023年2月5日|日| 14:00~15:30

美術館講座 「古代メキシコから20世紀半ば
までのメキシコ美術の概観」

講師 真世士マウ氏(岡山県立大学准教授)
会場 2階ホール(先着180名) ※当日先着順、要観覧券(半券可)



収蔵品の紹介 Vol. 10

浦上玉堂(寒巖林松図)
江戸時代後期(19世紀初期) 紙本墨画淡彩 37×32cm
細かな描写と記号的な表現とを、モチーフの直線的な形状や配置によってまとめる。筆勢は抑え、焦墨の塗り重ねが画面内に変化を、疎密の対比が空間をもたらす。淡墨で描かれた家屋は木々に隠れ、その存在感を一層控えめにする。人の姿は見えない、世俗を離れた静かな山間。(森田)

総社と会津、二つの講座

守安 収

去る10月27日、総社観光大学「古代吉備のロマン学」の一コマで「雪舟さん」についてお話をしました。場所は、涙でネズミの絵を描いたという逸話が伝わる宝福寺です。ここ10年来、雪舟さんと小学校区が同じという縁もあり、講師を続けています。方丈に椅子を並べて90分の座学のあとは皆さん座禅体験。4日間連続、終日の講座なので受講するには相当の覚悟がいるはず。でも民俗学の泰斗神崎宣武先生のプロデュースですからバラエティーに富み、楽しみながら学べると好評のようです。私は先生が総合プロデューサーを務めた「国民文化祭おかやま 2010」以来のお付き合いですが、学識はもちろん、さまざまな意見、活発な議論をまとめ、落としどころへと導く手腕も素晴らしく、尊敬しています。▼終了後は東京へ。翌日、会津若松の福島県立博物館で催される美術講座「気まぐれ放談：絵を売らなかった画人・浦上玉堂」へゲスト参加するためです。50歳で岡山を出奔した玉堂は、翌年、二男秋琴11歳を連れて会津に向かい、藩祖保科正之を祀る土津神社の神楽再興を成し遂げます。秋琴はその功により会津藩士となりますが、会津戦争の折に進攻した備前藩士に伴われ岡山へ戻ります。85歳でした。彼の二男宗尚が備中鴨方藩に仕えて絶えた浦上家を再興し、岡山城下に住んで祖父玉堂同様、大目付の職に就くなど重用されていたのです。会津でその話をすると、脱藩という行為が簡単に水に流されるなんて考えられないとのこと。池田光政と保科正之という共に江戸時代を代表する名君の下で育まれた地域でありながら、異なる県民性を実感。それでも飲むもの食べるものの美味しいところは同じです。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようをお願いいたします。

編集後記

中西ひかる

気づけばもう年の瀬がすぐそこまで迫っており、館内では、来年の岡山の美術展や特別展の準備が着々と進んでいます。本誌を編集しながらふと、ナンバリングを確認してみると、今回で139号をむかえ、表紙の仕様を変えてからもう10号分発行していたことに、数字を見つめながらひっそり驚きました。まだ2年半ほどではありますが、読者の皆様にとっても、このリニューアルした表紙はなじみのあるものになってきたでしょうか。次はどんな作品が表紙を飾るのか、ぜひ予想しながら140号も楽しみにしていただけたいと思います。